

みんなの童話

昼下がりひるさの初夢はつゆめ



冬とは思えない、暖かい元旦の昼下がりでした。

「七福神の絵を、まくらの下にしておいて寝るといい初夢をみるぞ」

じいちゃんから聞いた良太は、新聞の絵をまねてやっとかきあげました。これでいい夢が見れるぞと大満足でベランダに出ました。

あれえ、庭の生けがきの前をひよこ、ひよこつと、黒いハットにマントの男が、バスケットをかかえて通りました。

今では見かけなくなつた格好に、

ちよつと興味がわいて、後ろすがたを見つめました。

男は、ゆらゆらゆれるかげを引きずつて歩いていきます。そのかげがなにか不気味な、は虫類がはつて行くようにみえました。

男は、30メートルほど先の電話ボックスの前で立ち止まりました。電話でもかけるのかな、でもちがいました。きよるきよる、辺りを見回すとしゃがみこみました。

どうした？ 背中しか見えませんが、なにかしているようでしたが、しばらくして立ち上がると、また周りをうろつ、うろつと見回して歩き出しました。

あれ、ボックスの前にバスケットがあります。忘れてつたんだ、でも男は気がつかないのか、街路樹のかげに消えて行きました。

思い出して引き返してくるかな、

でも現れませんでした。知つて置いていつたんだ、そう思つた時、

カチ、カチ、カチ、カチ・・・時をきざむ時計の音です。電話

ボックスの方から聞こえてきます。ひよつとしたら・・・おそろ

しい予感がしました。早く、だれかに知らせなくちゃ、

でも声が出ません。体も、金しぱりされたように動きません。

その時、男の消えた街路樹の間から、女の子と手をつないだ親子が出て来ました。

あぶない、にげるんだ！ でもふたりには聞こえません。ボックスに近づいて来ます。

カチ、カチ、カチ、カチっ時計の音が止まりました。

ドカーン！

ばく発音が耳をつんざきました。電話ボックスがふっ飛び、街路

樹がたおれ、黒煙が空をおおい、

なにも見えなくなりました。良太はつつぶせたまま、身動き

もできませんでした。どれだけたつたでしょうか、

ピーポー ピーポー
救急車の警報です。

つつぶせていた良太は顔をあげました。まっ黒におおつていた煙はいつか消えていきました。

止まるはずの救急車は通り過ぎて行きました。

ふっ飛んだはずの電話ボックスは昼下がりひるさの太陽に映えて立つていました。

たおれたはずの街路樹は、もとのままのすがたで、新春の風に葉をゆらせていました。

「かわいい子ねこ。ねえ、ママ」

「そうね。だれがすていつたんでしよう。かわいそうに」

生けがきの前を、バスケットをかかえた女の子とお母さんが、通つて行きました。

「は、は、はっは、良太の初夢は白昼夢だったか」

話を聞いたじいちゃんは、そう

言つてわらいました。

童話作法講座 しろやまの会
講師 寺澤 正美
さし絵 いわせ しんじ